

## 保育内容「表現」－乳幼児期の歌唱教材 －保育所での実践観察から見てきた歌唱教材の条件－

Musical tunes during early childhood in the area of expression  
The conditions crucial for musical tunes through observations at nurseries

原 友美

愛知みずほ短期大学

Tomomi HARA

Aichi Mizuho Junior College

### Abstract

Observations were made at two nurseries in Nagoya city on the practice of singing common Warabeuta. Children aged zero to two enjoyed singing Warabeuta according to the Kodály method, which simultaneously promotes cognitive and physical development.

In contrast, four-year-olds, by pursuing a sense of play with their friends, creatively reimagined how to sing the Warabeuta of the area in which they were brought up. Observations of four-year-olds also revealed limitations to the Kodály method.

Songs written by Yō Mine have ranges of pitch that are not too wide, and feature very cheerful motifs, so children became lively when singing them. Aki Maruyama's songs include onomatopoeic words that even children between six and twelve months old can imitate and "narratives" that gave the children richly imaginative experiences.

Overall, observations on the singing of Warabeuta and songs of Mine and Maruyama at two nurseries highlighted three conditions crucial for musical tunes during early childhood. These are ① that the Warabeuta belong to the region in which the children are being raised, ② that the lyrics include onomatopoeic words, and ③ that the children can become "protagonists" through singing

キーワード：乳幼児期，わらべうた，歌唱教材，保育所，

Keywords：early childhood, Warabeuta, musical tunes, nurseries

### はじめに

筆者は1980年から1年間週1回、名古屋市内T保育所で0歳児から2歳児を対象に、2007年には半年間週1回、名古屋市内W保育所で年少・年中児を対象に、わらべうたの実践を観察した。わらべうた遊びの実践を通

じて保育者と子どもたちとの心のふれあい、遊びのおもしろさの探求、および、子どもたちの認識や身体的な成長が見られた。このような積み重ねた実践の観察から、わらべうたについての考察を行う。

乳幼児期の歌唱教材は数多くあるが、作曲家の峯陽と

丸山亜季は乳幼児を対象とした理論的研究に基づいた歌唱教材を数多く作っている。現在でも多くの保育者や子どもたちに好まれていて、筆者が実践を観察した保育所でも歌われていた。

前回の瀬木学園紀要 12 号では保育現場での実践を基に、器楽教材について考察したが、**本論文では**、保育現場で多く歌われている歌唱教材の中から **1. わらべうた** **2. 峯陽が作曲した子どもの歌の特徴** **3. 丸山亜季が作曲した子どもの歌の特徴** について考察する。「保育の実践をどう理論として立ち上げるか」が 2018 年の日本保育学会第 71 回大会編集常任委員会シンポジウム「実践研究へのいざない」でも課題となっており、これらの実践から乳幼児期に適切な **4. 歌唱教材の条件** について『保育所保育指針解説』（2018 年）と対比して考察する。

## 1. わらべうた

筆者は保育所 2 箇所であそぼう遊びを観察したが、いずれも、ハンガリーの作曲家コダーイ・ゾルタン(1882－1967)の音楽教育理念に基づいて体系化された日本のわらべうたの実践であった。

1968 年にコダーイ芸術教育研究所（代表者 羽仁協子）が設立され、乳幼児の音楽教育は芸術音楽の音楽的要素を含む自国のわらべうたから始めるべきだと提唱された。同研究所からは、いくつかの書物が出版され、大人が乳幼児を対象に歌いかけ共に楽しむわらべうた遊びが数多く紹介されている。

1965 年～1975 年には『わらべうたであそぼう 乳児編』『わらべうたの課業と計画』等、そして 1998 年に『0・1・2 歳児クラス編 いっしょにあそぼう わらべうた』（以下、『いっしょにあそぼう わらべうた』とする）、2007 年に『わらべうた わたしたちの音楽—保育園・幼稚園の実践』（以下、『保育園・幼稚園の実践』とする）が出版されている。

以下に挙げる 2 箇所実践されたわらべうた遊びは、これらの書物にすべて収められている。発達の節目を押さえながら、子供たちのわらべうた遊びについて考察していくと同時に、上記の書物からコダーイの理論についても検討する。

### 【考察】

#### ① 0 歳児～2 歳児

乳児は生後 4 か月頃になると、つかんだものを見つめながら「目と手の協応」が始まる。この時期には物に対する興味を育てることが大切であり、同時にわらべうたが始められるべきだと筆者は考える。

『いっしょにあそぼう わらべうた』に載っている顔遊び「ここはとうちゃんにんどころ」（譜例 1）では、保育者は、子どもを抱っこした状態で子どもの顔を見ながら、リズムを把握する上で基本となる拍を感じながら、頬、おでこ、顎等、子どもの顔をつついてた。



譜例 1 『いっしょにあそぼう わらべうた』 34 頁

生後 6 か月頃のおすわりができる子どもを対象に「このここのこ」（譜例 2）は、子どもと保育者が向かい合い両手を持ち合い振る遊びであるが、子どもは、保育者の左右に振れる腕や手のひらの動きを通して注視・追視活動が活発になり、保育者と子どもの応答活動が見られた。



譜例 2 前掲書 56 頁

6 か月以降、1 歳前までは目にふれる物、手の届く物、あるいは探索活動で得られる物を数多く与えて目覚めている時の活動を豊かにすることが望まれるため、お手玉や木のおもちゃを使って「えんやらもの木」<sup>1)</sup>等が行われていた。

1 歳児の前半では、お友だちという感覚もわかり集団の中で言語の発達を促すことが目標とされ、1 歳児後半では「玩具等を実物に見立てるなどの象徴機能が発達し、人や物とのかかわりが強まる」<sup>2)</sup>。

『いっしょにあそぼう わらべうた』では「2歳児クラスの遊び」として「さるのこしかけ」（譜例3）がある。子どもたちは、ぬいぐるみや人形を持って振りながら「めたかけろ」で人形の腰を折ってみせていた。この遊びでは子どもが大人に世話をしてもらう生活の一場面を、自分から思いついて人形や他の子どもたちにしてあげる「移し替え」が、子どもたちの中に育てられていた。



譜例3 前掲書 86頁

また、「ぎっちょ」（譜例4）（「2歳児クラスの遊び」）では、「米をつきます」と言って、子どもの両手の中に保育者の両手を入れて歌に合わせて上から下へ振り（米をつく格好）、「こめつけた」で子どもと保育者は同時に手を止める。この見立てる力を生かした遊びは、保育者と子どもの役割を交代したり、「だれが一番たくさんつけたかな」「お米をかき集めてごらん」などと、ことばや動作で意味づけてやることによって子どもたちのイメージはいつそう具体的になり、遊び自体も、おもしろくなっていた。子どもたちが遊びを発展的に楽しむことによって、より具体的な場面の再現も図られ、言語の発達も促進されているのではないと思われる。



譜例4 『保育園・幼稚園の実践』 83頁

以上の考察から、0歳児では保育者の手や腕の動き等によって子どもの注視・追視活動がいつそう促進されていることがわかる。また、1歳児後半の発達の特徴と思われる「移し替え」「見立てる力」の現れは、2歳以降も、わらべうた遊びの中でしっかりと発展的に育てられていた。子どもたちが遊びを楽しみながら、同時に思考や認識、身体的な発達が促進されるよう考慮されている点において、2箇所実践されているわらべうたは評価できるであろう。

## ②3歳児～4歳児

3歳以上の集団で遊ぶわらべうた遊びも保育現場で多く見てきた。コダーイ芸術教育研究所著『保育園・幼稚園の実践』では3歳児の遊びにも速度が標記され、「テンポも、一度適当なテンポをとったら、その遊びが終わるまでいつも同じテンポを保たなければなりません。いつも清潔に歌える年齢なりの水準があるように、同一テンポを保つことも、・・・年齢ごとの水準に達しなければなりません」<sup>3)</sup>と記述されている。

また、音程に関してのコダーイの理論を次に示すと、「清潔に歌う」ということは、「“音痴でなく”音程を正しくとって歌う」ということで、歌い方の技能のもっとも重要な部分であり、子どもの音楽性を育てるためにも、最も重要なこと」<sup>4)</sup>であるようだ。しかし、わらべうたでは、コダーイの理論である一定のテンポを保つこと、音程を正しく歌うことにどんな意味があるのかと筆者は疑問に思う。論文等で、このように批判されることもなかったように思われる。



譜例5 『わらべうたであそぼー 乳児編』 17頁

保育所で観察した譜例5の「はちはちごめんだ おらまだぼやら チク」というわらべうた遊びがある。さされまいとして逃げる坊やたちをハチが懸命に追いかける。遊びに夢中になるに従ってテンポは速くなる。「チク」で坊やはハチに刺され遊びは帰結するが、さされた坊やが今度はハチになり追いかけることによって、遊びは再び続行していた。

もし、テンポを一定に保つことを強制したら、子どもたちの遊びはおもしろさや緊張感を欠いた活気のないものになるであろう。

さらに、コダーイの理論は『保育園・幼稚園の実践』の中で「歌い方の技能」<sup>5)</sup>について、「音楽的能力の発達と歌い方の技能の進歩が可能である」条件として「年齢に適した音域のせまい節」「民族の伝承であっても半音進行のない節」「同じく4分音符、8分音符、4分休符以外の難しいリズムの含まれないもの」等を挙げている。

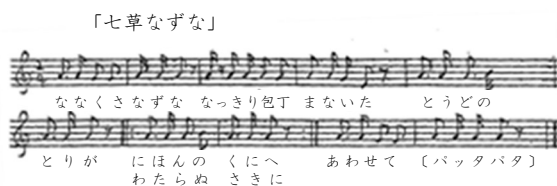
譜例6と譜例7は同じわらべうた「七草（ななくさ）なずな」である。

譜例6は、町田嘉章、浅野建二編『わらべうた』（岩波書店 1962年）に集成されているわらべ歌の一例で

あり、子ども同士の遊びの中で形を変えつつ伝承され歌われてきたものである。符点八分音符、16 分音符が楽譜には見られる。

譜例 7 は『いっしょにあそぼう わらべうた』や『保育園・幼稚園の実践』に載せられている歌で、譜例 6 と比較すると符点等がなく、楽譜は、やや簡略化されている。

その理由として、『保育園・幼稚園の実践』の中では年中組から「課業の計画」に「リズムたたき」<sup>6)</sup>が挙げられている。その内容は、「大人がリズムたたきし、子どもはまねっこでたたき返す」「短い曲を全曲、リズムたたきする」「大人のリズムを聞いて、曲を当てる」等であり、「リズムたたき」という課題のために、子どもが少しでもリズムを把握しやすいように、また、小学校の音楽教育とりわけ「読譜」へ繋げていくために楽譜は簡略化、ソルフェージュ化されていると言える。このようなコダーイの理論に則して、果たして子どもの遊びのリズムを全国一様に簡略化してよいかという疑問は残る。



譜例 6 『わらべうた』 195 頁



譜例 7 『いっしょにあそぼう わらべうた』 18 頁

前述した名古屋市内W保育園での年中児のわらべうた「どんどんばしわたれ・・・こんこがでるぞ・・・こんこん」<sup>7)</sup>の実践では、こんこ（きつね）のところを当てられた子どもが自分の好きな動物の名前にして、歌の終わりに鳴き声を入れ、次の子どもにタッチしていた。動物の音韻数によっては、符点になったりメロディーも変わっている。いっしょに遊んでいる他の子どもたちは、次にどんな動物が出て来るか、どんなメロディーやリズムに創り変えられるか、皆、ドキドキしながら楽しんで

いた。

## 2. 峯陽が作曲した子どもの歌の特徴

峯の曲に関しての先行研究はないと思われる。峯陽（1932-）は 1961 年頃から合唱団の中で集団保育のための歌の創作を始めた。子どもたちのために「みんなすてきな仲間たち」という願望を込めて「どんどんマーチ」や「ガンバリマン」等の歌を作っている。動物の鳴き声や特徴をとらえた動物シリーズでは、「しまうまのうた」「くじらの赤ちゃん」「へびみて キャッ」等、また、行事の歌も多く「遠足のうた」「誕生日のうた」「運動会のうた」等があり、これらの歌は峯陽作品集Ⅰ（1971 年）、Ⅲ（1974 年）（いずれも社会福祉文化集団発行）に収められている。

峯は教材の果たす役割について「教育は文化の伝達だとしても、注入すれば伝達できるのではなく、音楽文化を共有することではじめて、伝達が可能になると思う」<sup>8)</sup>と述べている。また、音楽文化を共有する子ども集団に対しては、「管理、統率するための集団ではなくて、子どもたちが、目標をたててお互いに規律と方法をもって自主的に組織し合える」<sup>9)</sup>集団作りをめざし、その峯の思いは特に「ガンバリマンのうた」<sup>10)</sup>に反映されている。歌詞にある「みんななかま」というのは、峯の願望であり、「エイ！エイ！オウ！」に向かって 1 音ずつ高くなっていき、曲としての盛り上がりをもたせている。

峯の著書『保育のための音楽入門』（青木書店 1980 年）「IV 章 子どものうたの作り方」には、歌作りのポイントとして次の 3 点が述べられている。筆者が観察した保育所で、0 歳児後半から 4 歳児まで、模倣も含めて幅広く歌われた峯の歌を例に挙げながら、その特徴について考察する。

### ① 「幼児が一度聞いたなら覚えられるように、同じリズムをもった句をくり返す」

「ゴリラのうた」<sup>11)</sup>は二部形式 8 小節の中で「むねをたたいてエッホッホ」が 2 度くり返されているため覚えやすい「エッホッホ」に子どもたちはゴリラのひょうきんさを表現していた。「ライオンのうた」<sup>12)</sup>では、16 小節のうち、「ライオン ウァオ」が半分を占め、子どもたちによってくり返される「ウァオ」の短 3 度は、8 か月頃の子どもたちは正確ではないが模倣できるし、4 歳児が歌うとライオンが威張って吠えているように聴こえた。

### ② 「短い詞のなかに、子どもの生活やあそびをもりこむ」

「ながぐつマーチ」<sup>13)</sup>でも符点のリズムはくり返されている。長ぐつをはいてスキップをしながら、この歌を歌ってどろんこ道へ入っていく子どもたちの生活がよくわかる。終結部の「ドンドン」で、しっかり足を地につけている。

### ③ —「メロディー、リズムを決めるときは、詞のままで、身体を動かして子どもといっしょにあそびみる」—

「ワニのうた」(譜例8)は、目玉をぎょろぎょろさせながら、ゆっくり泳いでいるワニを表現し、この歌が生まれたと感じられる。1歳児では、曲の一部を歌いながら身体を動かして保育者の表現を模倣していた。「キリンのうた」(譜例9)では、子どもたちが背を高くして首を長くしてキリンを表現し、そこから見える風景が歌詞に込められていると思えるが、曲としては、出だしの「キリンキリンリン」のシンコペーション、そのメロディーから1音下がって同様のシンコペーションで「たかいきのは」となっており、そこに、ちょっとおすましした人気者のキリンが見てとれる。

ワニのうた

① 峯 陽 曲  
上坪マヤ 詩

♩ = 96~108

譜例8 『峯陽作品集Ⅰ』 10頁

筆者は、峰の作曲りのその他の特徴を次のように考える。

(1)「ゴリラのうた」の3小節目、階名「ラドレミ」と「ワニのうた」の出だしの「ミレミソラド」は民謡音階のテトラコード的旋律になっており、わらべうた

的雰囲気が醸し出され、洗練された感じがする。

(2)おおかたの曲の音域が一点へを中心に一点ハから1オクターブで、音域が広くなく歌いやすい。曲想も非常に明るいため、子どもたちが歌って元気になれる曲であると言える。

キリンのうた

① 峯 陽 曲  
上坪マヤ 詩

♩ = 96~108

譜例9 前掲書 9頁

### 3. 丸山亜季が作曲した子どもの歌の特徴

丸山の先行研究としては中村紗和子(2015)の丸山の「リズム表現」に関する論文や「音楽教育の会」に対しての丸山の主張を取り上げた小山英恵(2011)の論文等があるが、筆者は保育所で0歳児半ば～4歳児まで、模倣も含めて歌われた丸山の歌の特徴について考察する。

丸山亜季(1926-2014)は1950年頃から群馬県の島小学校や埼玉県のとくら保育園の実践に関わり、たくましく育っていく子どもたちのイメージから歌唱教材を多く作曲した。『授業のための歌曲と音楽劇集：丸山亜季作品集』(丸山亜季著 飯塚書店 1975年)、『さくら・さくらんぼのリズムと歌』(斎藤公子著 群羊社 1980年)にその多くが載せられている。

丸山は、西洋音楽の和声基盤を用いて作曲されているにもかかわらず、和声的な誤用があることを指摘されたが、修正することはなかった。「音楽することで・・・人間がそだっていくことがなかったら、音楽教育の意味がない」<sup>14)</sup>とし、保育者と子どもたちが最高の瞬間を創り出していくことができるのは実際の保育現場だと考えた。また、教材を使って子どもを引きつけ、子どもたちとともに創造的に音楽することが最も重要であると考へ、その歌唱教材の条件として次の6つを述べた。これらの条件<sup>15)</sup>が曲の中にどのように盛り込まれているか、6つの条件と具体的な例を挙げ考察する。

#### ① —「出だしの音が気持ち良く響くこと」—

「機関車のうた」(譜例10)と「小鳥とぶどう」(譜例11)は出だしの音が二点二、いずれも高く響き、主



も乗り越え、とげのあるサボテンを一飛びする「ちびすけ」に保育所の子どもたちは共感し、曲の最後5、6小節の盛り上がりからはエールを送っているようにも感じられた。

#### 4. 歌唱教材の条件

筆者は保育現場で保育者と子どもたちが歌唱教材を媒介として丸山の言う「創造性の高い最高の瞬間」を創り出しているのをたびたび目にした。峯も丸山も歌唱教材の条件を述べているが、わらべうたも含めて、実践を考察することによって見えてきた筆者の考える歌唱教材の条件について明確にする。

##### ① 子どもたちが育った土地のわらべうた

前述のように、わらべうたは「目と手の協応」の始まる生後4か月から始められるべきで、0歳児では大人の遊具等による左右動等によって子どもの注視・追視活動はいっそう促進される。また、1歳児後半の発達の特徴と思われる「移し替え」「見立てる力」の現れは、2歳以降も、わらべうた遊びの中でしっかりと発展的に育てられていると言える。コダーイ芸術教育研究所によって子どもたちが遊びを楽しみながら、同時に思考や認識、身体的な発達が促進されるように考案されたわらべうたは歌唱教材として評価はできる。

しかし、特に3歳以上のわらべうた遊びは、子どもたちが育った土地のことばで語られていて、遊びつくしておもしろさごとつたえられるもの、さらに遊びの楽しさを皆で追求できるものが望ましいと思われる。コダーイによって理論づけられているように一定のテンポ、音程やリズムの正確さを求めるのではなく、テンポを自由に、音構造やリズムは子どもたちが皆が心をつないで創造的に創り変えられるべきものである。

『保育所保育指針解説』（2018年）とコダーイの理論を対比してみると、3歳以上の領域「表現」の内容について『保育所保育指針解説』では、「子どもが思いのままに歌ったり、簡単なリズム楽器を使って遊んだりしてその心地よさを十分に味わうことが、自分の気持ちを込めて表現する楽しさとなり、生活の中で音楽に親しむ態度を育てる。ここで大切なことは、正しい発声や音程で歌うことや楽器を正しく上手に演奏することではなく、子ども自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうこと」<sup>18)</sup>であると述べているのに対し、コダーイの理論では、わらべうた遊びの中でも読譜へ繋げるために音程の正確さが重要視されていた。

##### ② 歌詞の中に擬音語があること

生後4か月頃になると、母音を主とした喃語が聞かれ

るようになる。喃語は保育者等に働きかけられている時、また、遊具等で遊んでいる時等、比較的機嫌のよい時に発しているプレジャーサインであることが多い。

生後6か月頃になると、母音に子音がプラスされたより複雑な音声である喃語が聞かれるようになってくる。「子音は「バ」「ブ」などの「b」、「ダ」の「d」、「ンマ」の「m」、「パ」「プ」などの「p」に見られるように、唇や舌で構成される発声为主であるが、次第に、反復喃語と呼ばれる「ダダダ」「マママ」といった繰り返しがみられるようになる」<sup>19)</sup>。この時期の子どもたちは、丸山亜季作曲「すすめ山賊」<sup>20)</sup>の歌詞の中にある「・・didiwadi di wa」の一部分をすごく楽しそうに模倣していた。

生後9か月を過ぎると「バーン」、「ポーン」や「ピョーン」というような動作に合わせた効果音であるヴォーカルマーカが見られるようになるので、丸山の作曲した「ちびすけ」の「ピョーン」や「森のかじや」<sup>21)</sup>の「トンテン」に身体全体で楽しく反応し、子どもたちからこれらの擬音語が聴かれた。

音の模倣ではなく、自立的な歌唱行動の始まりは11か月頃と思われた。誕生後1年を迎える頃には初語が聴かれる。歌唱行動や言語の発達を育てていく上で、擬音語が入った歌唱教材は重要な役割を果たしていると言える。

##### ③ 子どもたちが歌うことによって

###### 「主人公」になれること

一例を挙げるならば峯陽作曲「ゴリラのうた」、歌詞の内容を要約すると「自分たちはアフリカのジャングルに住むゴリラだ、バナナも食べるぞ」。丸山亜季作曲の「機関車のうた」の歌詞の内容は「ぼくらのからだは鉄づくり、だから何物にも負けない、腕を組んで前へ進んで行くぞ」。峯・丸山が作曲した、このような子どもが主人公になれる歌は他にも数多くある。

「主人公」になれるからこそ、峯が歌作りのポイントに挙げる「同じリズムをもった句のくり返し」も子どもにとって飽きることなく、逆に印象強く受け留められている。また、丸山が教材の条件に挙げている「音程のリズミカルな飛躍が子どもを引きつける」ことも、「主人公」になれるからこそ、音程の飛躍も心地よく身体ごと歌唱表現できている。子どもの数だけ、それぞれ違った個性をもったゴリラが表現され、また、皆で団結して機関車を表現できていた。

以上、保育現場で保育者が子供に語りかけたわらべうた、子ども集団によって歌われた曲の数々の考察から、理解できたこと、発見したこと等を筆者の中で温めなが

ら、教材の条件として上記の3つを明確にした。

## おわりに

今回は、幼稚園・保育所の歌唱教材として大切な「四季折々の歌」については言及していない。丸山は「もみじ」「チューリップ」は一般的な風景であったり、きれいな花のうたであっても、しばしば説明的で「大人の世界」からみた歌であり、「子どもって主人公になれない」<sup>22)</sup>と述べるが、筆者は次のような別の見方をする。

「四季折々の歌」では、歌唱教材の導入部分、すなわち「子どもの中へ入るセンス」が最も大切と考えられる。子どもたち一人ひとりが生活経験に基づく歌詞の解釈や曲のイメージを出し合って感動を共有しながら歌に入っていくことが表現を深めていく基になると思われる。

2018年7月7日に愛知みずほ短期大学主催、「みずほヘルスセミナー第2回」の講師を務めさせていただいた。テーマは「歌って、奏でて、心つないで」であった。よく知られている歌の曲をアレンジし導入部分も工夫した結果、一定の評価を得ることができた。

今後はヘルスセミナーの内容にふれながら、「四季折々の歌」等の導入部分の工夫について考えてみたい。

## 謝辞

保育の実践を観察させていただき、歌唱教材について学ばせていただいた保育所の皆様には心より御礼を申し上げます。園名を公表しないというお約束で論文としてまとめさせていただきました。

## 引用文献

- 『わらべうた わたしたちの音楽 ―保育園・幼稚園の実践―』 コダーイ芸術教育研究所著 明治図書 2008年 84頁
- 『保育所保育指針』 第2章子どもの発達 厚生労働省 2008年
- 『わらべうた わたしたちの音楽 ―保育園・幼稚園の実践―』 128頁
- 前掲書 127頁
- 前掲書 126頁
- 前掲書 138頁
- 前掲書 212頁
- 峯 陽 「教材を作る個人的な体験から」『季刊 音楽教育研究』誌 41号 音楽之友社 1984年 80頁
- 『保育のための音楽入門』 峯 陽著 青木書店 1981年 151頁

- 10) 峯陽作品集Ⅲ-No. 3 『スターマンのうた』 社会福祉文化集団 1980年 19頁
- 11) 峯陽作品集Ⅰ-No. 1 『ライオンのうた』 社会福祉文化集団 1971年 6頁
- 12) 前掲書 5頁
- 13) 峯陽作品集Ⅰ-No. 4 『ともだちいっぱい』 社会福祉文化集団 1974年 6頁
- 14) 『子どもと音楽を創る』 丸山亜季著 一ツ橋書房 1978年 229頁
- 15) 丸山亜季「音楽におけるドラマの発見」『季刊 音楽教育研究』誌 6号 音楽之友社 1976年 88頁～90頁
- 16) 『さくら・さくらんぼのリズムとうた』 斎藤公子著 群羊社 1980年 187頁
- 17) 前掲書 155頁
- 18) 『保育所保育指針解説』 厚生労働省 2018年 274頁
- 19) 『生活事例からはじめる 保育内容 言葉』 徳安敦、堀科編著 青踏社 2016年 34～35頁
- 20) 『さくら・さくらんぼのリズムとうた』 171頁
- 21) 前掲書 146頁
- 22) 『子どもと音楽を創る』 丸山亜季著 一ツ橋書房 1978年 10～12頁

## 参考文献

- 原 友美 「乳幼児期の歌唱教材に関する一考察」『季刊 保育問題研究 101号』(新読書社 1986年)を修正・補筆した。補筆の内容は、W保育園での実践からの考察、峯・丸山の他教材の考察、さらに1998年以降、コダーイ芸術研究所から出版された書物の内容の検討、『保育所保育指針解説』とも対比した
- 勅使千鶴 「あそびの指導と実践記録の書き方」『現代と保育』誌 5号 ささら書房 1979年
- 永田栄一 『遊びとわらべうた』 青木書店 1982年
- 本多峰和 古賀弘之 「オルフとコダーイの共通点と相違点」―わらべうたを題材として― 日本保育学会 第66回大会発表要旨集 2013年
- 小山英恵 「音楽教育の会」における音楽教育：丸山亜季の主張に焦点をあてて 教育方法学講座紀要『教育方法の探究』 京都大学教育学部教育課程・教育指導研究室編 14号 2011年
- 中村紗和子 「音楽教育の会」と丸山亜季の保育実践 ―「リズム表現」の実践を中心に― 音楽学習学会誌『音楽学習研究』 第11巻 2015年
- 特集 「音楽の授業研究―合唱『一つのこと』」『教育』誌 国土社 1968年12月号 69頁